

今月の谷口雅春先生のお言葉

自然界の神秘に気づく心をはぐくもう

生命の不思議さにビックリする心

かの國木田獨歩くにきだどろぼの有名な小説『牛肉と馬鈴薯』ばれいしょをあなたがお読みになったことがあるであろう。あの主人公は「わたしの願いはビックリしたいことです」と叫んでいたのである。人間にとって最も大いなる不幸はあらゆる現象が当り前に見えすぎることである。生命の退歩はそこから始まる。

少年よ、少女よ、あらゆる事象にビックリせよ。ビックリせよと、こわがれというのではない。その

事象の奥にある「生命」の不思議に驚異するのだ。林檎が落ちて、その落ちる力の不思議さにビックリせよ。鉄瓶の蓋が持ち上がるならば、それを持ち上げる湯気の力にビックリせよ。美しく咲いた花を見るときには、その咲く花の力の不思議さにビックリせよ。また自分自身の生きている力にビックリせよ。

少年よ、少女よ、青年よ、否、壯者も、老者も、「あなたが生きているのは心臓が動いているからです。心臓がとまれは死にます」などという医学の教でこの不思議な生命を当り前の現象だとは思わぬ。医学には心臓が動く事は判ついても心臓が何故動くかは判らないの

だ。生命がどこから来るかは判らないのだ。まだまだ当り前だというには早いのだ。好い加減なところでビックリすることを止めるな。

(新編『生命の真相』第22巻116～117頁)

子供のビックリする心を押し消してはいけない

林檎が落ちたのを見て、その不思議さに驚異したニュートンや、湯気が鉄瓶の蓋をうごかす力に驚異したジェームズ・ワットは、科学界の大天才となったのである。生老病死の四苦を見てビックリした釈迦は一大宗教的天才となったのである。自分に肉親の父親がないことを知ってビックリしたイエスは、天に父を発見してこれも宗教的天才となったのである。自然や人間の美を見てビックリした多くの人々は、ラファエルとなり、ミケランジェロとなり、ミレーとなり、ロダンとなり、シエイクスピアとなった。

実際、天才とはいつまでも少年少女時代の「ビックリ

する心」を成長後も有ち続けている人のことである。

この幼年時代の「ビックリする心」を平凡化するな。この神秘に驚異する心をいたわり育ててやるようにつとめよ。

諸君は、子供が「何故空にお星様があるの、お星様は何故落ちないの、お星様は何故光っているの……」などというほとんど無限に尽きない質問を矢つぎ早やに浴びせかけられて弱らされたことはないであろうか。「もうこの子のうるさいのは閉口する」と小言をいったことはないであろうか。「お星様が光っているのは当り前じゃないか。花が咲くのは当り前じゃないか」などとあらゆる神秘を「当り前」という説明に押しつけて、子供の「ビックリする心」を押し消してしまったことはないであろうか。

そういう時にはこういつて答えよ 「それは実に貴い不思議なことだ。眼に見えない不思議な神様の息がかかるとお星様は光るのだ。眼に見えないところにも神様はいなさるのだ。お星様が落ちないのもその神様のお力

だ。花が咲くのもその神様のお力だ。神様のお力をお迎えするようにこうして水をかけ土を耕して人間が待っているのだ」と。

かくの如くいつて子供の「神秘がる心」を生かせ。それを押し消すな。「神秘がる心」こそインスピレーションの源泉である。直覚は神秘にあこがれる心にのみ、照射して来る神秘界からの光であるのだ。

（新編『生命の實相』第22卷117～119頁）

「神秘がる心」から、

あらゆる善きものが現れ出てくる

あらゆるものが頭でわかると思うな。あらゆるものが科学的知識でわかると思うな。分類的分析的な知識にのみ頼りすぎると直覚力は鈍りがちである。（中略）

さてしからはこの何事にも絶対に必要な直覚力を養成するには如何にすべきか。先刻もいつたように、幼時より子供の「神秘がる心」を押し消さないようにすること

だ。神秘なことを神秘として教えよ。深く考えれば実に神秘であるところの現象を、当り前の茶飯事だとして、見のがしてしまふような習慣をつけてはならぬ。人間を心臓というモーターで動く機械だと教えてはならぬ。草木を唯の毛細管現象で生長する機械だと教えてはならぬ。神仏を偶像であると教えてはならぬ。あらゆる物にやどる生命の神秘を教えよ。神秘に驚異し、生命を崇敬し、その生命の神秘に一步でも近づぐことを名譽と思い、生命を合掌礼拝するように子供を教えよ。

嗚呼！ 生命の神秘を驚異し尊ぶ心 隣人愛も、生物愛護も、敬虔なる宗教心も、画期的な科学的発明も、偉大なる哲学も、妙なる芸術も、それから実業界の素暗しき成功さえも、皆この生命の神秘を礼拝する心によって得られるのだ。（新編『生命の實相』第22卷119～122頁）

